

「院政期書写」の仮名古筆切の¹⁴C年代
—伝藤原行成筆未詳散らし歌切および伝源俊頼筆民部切を例に—

**Radiocarbon dating of kana kohitsugire calligraphies believed to have been copied from the second half of the 11th century to the first half of the 12th century:
Dating of Misyo-tirashi-uta-gire attributed to Fujiwara no Yukinari and dating of Minbu-gire attributed to Minamoto no Toshiyori**

小田寛貴^{1*}・池田和臣²
Oda Hirota^{1*} and Ikeda Kazuomi²

¹名古屋大学宇宙地球環境研究所・²中央大学文学部

¹ Institute for Space-Earth Environmental Research, Nagoya University, Chikusa, Nagoya 464-8601, Japan

² Faculty of Letter, Chuo University, Hachioji, Tokyo 192-0393, Japan

* Correspondence author. E-mail: oda@nendai.nagoya-u.ac.jp

Abstract

Kana (a Japanese syllabary) is said to have been invented in the middle of the 11th century. Earlier documents, records, and books have confirmed only a few examples. Even in the elegant calligraphy of the Heian period, there are cases in which the precise age of the inscription is unclear. Most remaining works of calligraphy that elude precise dating were written in the Insei period (1050–1130). We therefore decided in this study, to perform radiocarbon dating for two works of calligraphy from the Insei period. Paper samples weighing 10–50 mg were cut from the margins of the calligraphies, soaked in H₂O to peel away the original sheets from the lining, and washed in H₂O, 1.2N HCl, and 1.2N NaOH. A graphite target was prepared from each sample. The radiocarbon ages were measured using the CAMS-500 (NEC, U.S.A) at Paleo Labo Co., Ltd., Japan. The calibrated radiocarbon age of Misyo-tirashi-uta-gire attributed to Fujiwara no Yukinari indicated that it was written from the late 10th century to the early 11th century, making it a rare example precedent to the Insei period. The calibrated radiocarbon age of Minbu-gire attributed to Minamoto no Toshiyori, meanwhile, indicated the middle of the 17th century. We thus determined that the latter was a copy or counterfeit written several centuries later.

Keywords: 院政期 ; 仮名 ; 古筆切 ; ¹⁴C 年代

1. はじめに

平安時代の古写本は、室町時代以降の茶道の流行に伴い、茶室で鑑賞する掛軸の題材等にするため切断され、現存する数は極めて少ない。しかし断簡としては、かなりの量が伝世していることになる。これを古筆切という。古筆切は断簡といえども、稀少な古写本の一部であり、その史料的な価値は高いはずである。しかし、わずか数行の書であることから、その書風や字形から年代を特定することが困難なことが多い。

一般に、仮名は、高野切という古筆切が書かれた11世紀の半ばに成立されたといわれている。高野切以前の年代の判明している仮名遺品は、「因幡国司解案紙背仮名消息」などわずか6～7点しか知られていない。こうした状況の中で、平安時代の仮名の名筆といわれる古筆切で、書写年代がはっきりしないものは、1050–1190年、すなわち院政期のものとされることが多い。しかし、その中

本原稿は、第29回(2016年度)名古屋大学宇宙地球環境研究所年代測定研究シンポジウム・一般講演の内容を主体にまとめたものです。

には、それ以前の稀少な史料が含まれている可能性がある。一方で、後世になって書かれた臨書もあろう。そこで本研究では、院政期書写とされる古筆切について、その書写年代、ひいてはその史料価値を明確にすべく、 ^{14}C 年代測定を行った。特に、藤原行成の筆とされる未詳散らし歌切れ、源俊頼の筆とされる民部切について、詳述したい。

2. 資料

測定資料は、院政期を含む、奈良時代から江戸時代までの各時期の書風をもった66点の古筆切である。本発表では、伝藤原行成筆未詳散らし歌切および伝源俊頼筆民部切について詳述する。古筆切には、元は同じ古写本であった別の頁や部分が存在する。これをツレという。未詳散らし歌切には、6葉のツレがあり、その散らし書きの優秀さ、連綿の流麗さなどから、書芸美の高さが評価されている。民部切は、胡粉を引いた地に雲母で鳳凰唐草文を刷り出した唐紙という料紙に書かれた古今和歌集の古筆切であり、40数葉(枚)のツレが知られている。

3. 実験

これらの端から測定試料を裁断し、蒸留水中に浸し、文字の書かれている本紙を裏打紙から剥離させた。その後、超音波洗浄、 $\text{HCl} \cdot \text{NaOH}$ による処理、グラファイト合成を行い、(株)パレオ・ラボ Compact AMSによって ^{14}C 年代を得た。

4. 結果

結果を表1に示す。暦年代への換算には、IntCal13校正曲線を用いた。民部切については、2葉のツレ(①, ②とする)について測定を行った。その内、一点①は2カ所から試料を採取し、測定を行った。

表1. 「院政期」古筆切の ^{14}C 年代

試料名	^{14}C 年代 [BP]	校正暦年代 [cal AD]
未詳散らし歌切	1042±19	988(998,1004,1012)1019
民部切①-1	251±17	1646(1650)1660
民部切①-2	237±18	1649(1656)1664,1788(1791)
民部切②	220±19	1655(1664)1667,1782(1796)

5. 考察

未詳散らし歌切の測定結果は、10世紀末から11世紀初頭の値を示した。仮名は高野切の書かれた11世紀半ば頃に完成されたといわれている。それ以前の仮名遺品は数点しか確認されていない。故に、この ^{14}C 年代は、伝藤原行成筆未詳散らし歌切という高野切以前の稀少な時代の遺品が新たに発見されたことを意味する。また、従来知られていた高野切以前の遺品は、消息・落書・日記・手控えなど、個人的な要素が強い史料に偏っている。これに対し、未詳散らし歌切は、他者の鑑賞を意識した遺品である。故に、この結果は、高野切以前の新遺品が発見されたというだけでなく、高い書芸美をもつ仮名が、高野切よりも早い時期に完成していたことを裏付ける証拠としての意義もある。さらに、この年代は源氏物語や枕草子が成立した国風文化の時期にあたる。これら文学作品は、後世の写本は伝世しているものの、原本成立時のものは残っていない。故に、この ^{14}C 年代測定によって、未詳散らし歌切が、国風文化期当時の文学作品に使われていた仮名の実態を示す史料となることが確認されたことになる。

一方、民部切の結果は、いずれも17世紀中期を示すものであった。民部切は院政期の書写とさ

れながらも、その唐紙が院政期とするには粗雑すぎている、同筆の民部類切には 1205 年選定の新古今の歌が書かれているなど、不審な点がある。さらに不審なのは、民部切に全く同じ部分を書いた断簡が 2 葉存在すること、古今和歌集のはずが、拾遺和歌集固有の表記法が用いられていることである。こうした点を踏まえ、その書写年代を鎌倉時代とする説がある。しかしながら、 ^{14}C 年代測定の値は、それにも及ばぬ江戸時代のものという結果であった。民部切に添えられた鑑定書(極札)で最も古いのは、二代畠山牛庵 (1625–1693)、古筆家別家二代了佐 (1629–1674) であり、その生存期間と本測定結果は一致している。すなわち、民部切は、極札が書かれた 17 世紀に作られた書であることになる。さらに、一つの写本が裁断されて古筆切となったのであれば、同じ部分を書いた断簡が 2 葉存在するはずがない。この点と ^{14}C 年代から考えると、民部切は、古写本が解体されてできたものではなく、初めから古筆切として制作されたものである可能性を指摘することができる。

謝辞

株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループの伊藤茂氏、安昭炫氏、佐藤正教氏、山形秀樹氏、小林紘一氏、Zaur Lomtadidze氏、Ineza Jorjoliani氏には、 ^{14}C 年代測定を行うにあたり大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。また、本研究の一部には、平成28年度～平成31年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)(課題番号:16H03101、研究代表者;小田寛貴)を使用しました。記して感謝いたします。

日本語要旨

平安時代の仮名の名筆といわれる古筆切で、書写年代がはっきりしないものは、1050–1190 年、すなわち院政期のものとされることが多い。しかし、その中には、それ以前の稀少な史料が含まれている可能性がある。一方で、後世になって書かれた臨書もある。そこで本研究では、院政期書写とされる古筆切について、その書写年代、ひいてはその史料価値を明確にすべく、 ^{14}C 年代測定を行った。未詳散らし歌切の測定結果は、10 世紀末から 11 世紀初頭の値を示した。仮名は高野切の書かれた 11 世紀半ば頃に完成されたといわれている。それ以前の仮名遺品は数点しか確認されていない。故に、この ^{14}C 年代は、伝藤原行成筆未詳散らし歌切という高野切以前の稀少な時代の遺品が新たに発見されたことを意味する。また、従来知られていた高野切以前の遺品は、消息・落書・日記・手控えなど、個人的な要素が強い史料に偏っている。これに対し、未詳散らし歌切は、他者の鑑賞を意識した遺品である。故に、この結果は、高野切以前の遺品が発見されたというだけでなく、高い書芸美をもつ仮名が、高野切よりも早い時期に完成していたことを裏付ける証拠としての意義もある。一方、民部切の結果は、いずれも 17 世紀中期を示すものであった。民部切は院政期の書写とされながらも、その唐紙が院政期とするには粗雑すぎている、同筆の民部類切には 1205 年選定の新古今の歌が書かれているなど、不審な点がある。さらに不審なのは、民部切に全く同じ部分を書いた断簡が 2 葉存在すること、古今和歌集のはずが、拾遺和歌集固有の表記法が用いられていることである。こうした点から、その書写年代を鎌倉時代とする説があったが、 ^{14}C 年代測定の値は、それにも及ばぬ江戸時代のものという結果であった。院政期書写とされる古筆切の中には、院政期以前の稀少な資料が眠っていること、また、一方で後世の手になるものが混在していることが、本研究の結果から明らかにされた。